

はじめに

むかしむかし、琉球では、今のように、時計やカレンダーがなかったので、人々は、お空の星や月、太陽を使って暦（こよみ）を決めていました。

久米島では、何を使っていたのでしょうか？

ここに書いたおはなしが、みんなから忘れられないように、なくなってしまうないように、このパンフレットを作りました。

太陽石（ウティダいし） ってなに？

「太陽石」とは、久米島に伝わる、農業の時期を決めるための石です。この石を使って、日の出を観測していました。

この石を伝えたのは「堂比屋（どうーぬひやー）」という人です。唐（今の中国）から太陽石の知識を伝えました。それ以外では、養蚕や久米島紬の技術を持って帰ってきたといわれています。

「堂」というのは地区の名前、「比屋」というのが役職を表します。堂比屋には「一晩のうちで唐旅をして翌朝には帰ってきた」とか「良い堂比屋と悪い堂比屋がいた」とか「都に津波を起こした」などと多くの伝説が伝えられています

比屋定の太陽石の近くから



むかしは、
2か所とも、
海が一望で
きたそう。



島尻の太陽石の近くから

このパンフレットは、平成30年度「地域共創型学生プロジェクト（以下、ちゅらプロ）」で採択された、星の民話採集プロジェクト「ふしぬゆ※」より、作成されました。

ちゅらプロとは、琉大生が自ら「地域」に入り、地域の再生・活性化やそこでの課題の発見・解決等に取り組むという「公募型の正課外プロジェクト」です。

「ふしぬゆ」の母体は、琉大天文サークル「スターダスト」で、普段は、みんなで星を見たり、天文学者の先生の授業を受けたりして、宇宙を楽しんでいます。

星や宇宙を通して、久米島のことをもっと知ってもらえたらいいなと思っています。

※ふしぬゆ：沖縄の方言で「星の夜」

協力：沖縄伝承話資料センター
久米島博物館
久米島の方々

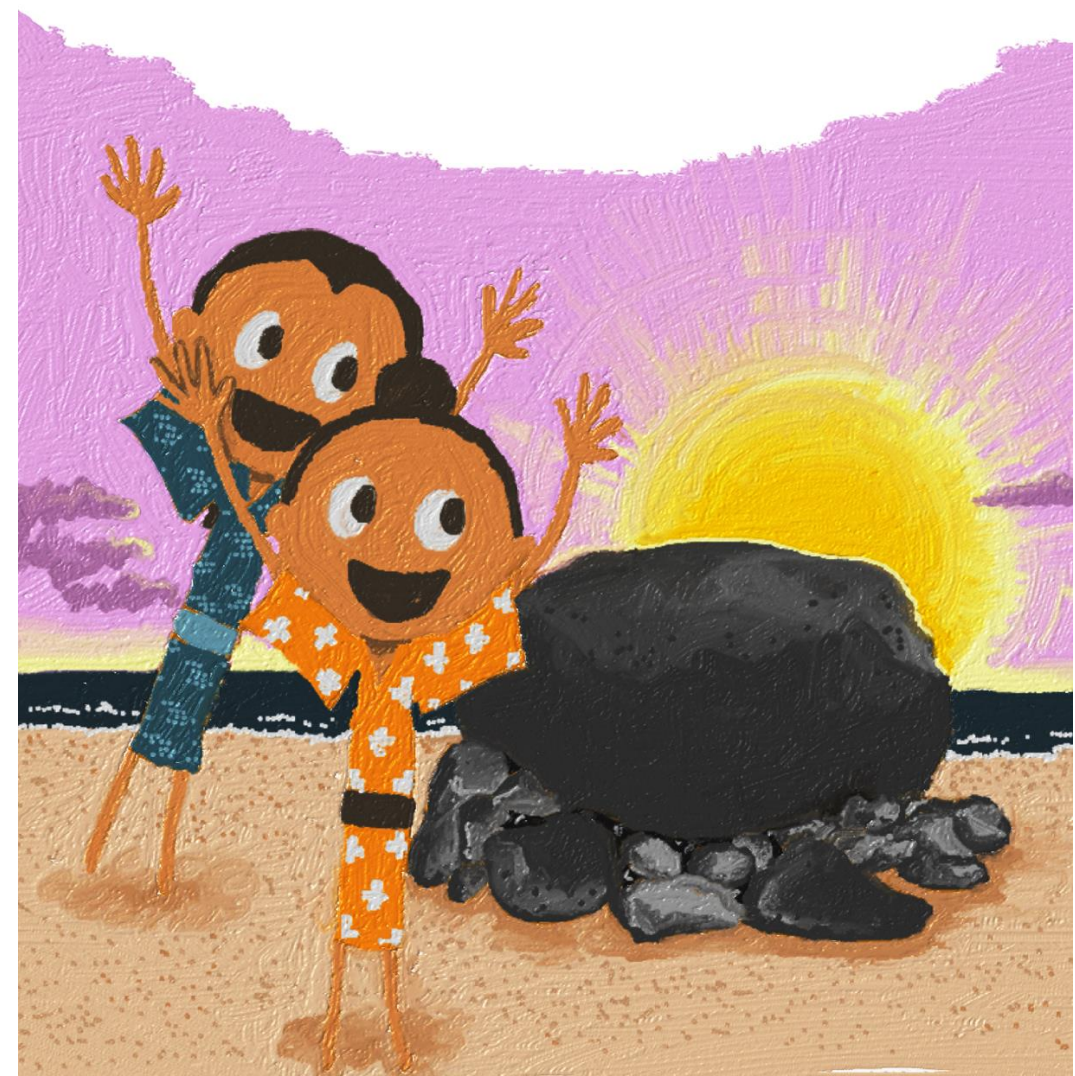
絵・漫画：はやのん理系漫画制作室
発行：「ふしぬゆ」／琉球大学理学部

長嶺実来・品川玲央

発行年月日：2019年2月28日



久米島の ウティダ石 （太陽石）



今から500年ほど前、久米島は2つの集落に分かれており、その一方の仲里村で、「ウティダ(太陽)石」という石時計を使って、季節の移り変わりを知り、農業に役立てていました。

比屋定のウティダ石

観光スポットにもなっている、旧仲里村にあるウティダ石は、高さ1.2m、幅2mほどの大きい石です。

夏至から冬至にかけて、日の出の位置は、東の空で北の方から南の方へ移動します。その位置を使って、季節を確認し、農業の収穫の時期などの目安にしていました。

正しい使い方は残っていませんが、春分・夏至・秋分・冬至の時にウティダ石からの日の出の位置を見れば、使い方がわかるかも？

石のてっぺんに線が書いてある…？



実はもうひとつあった？ 島尻のウティダ石

久米島の南の方、島尻でも同じようにウティダ石を農業のために使った人がいたそうです。



今は壊されていて、元の姿は誰もわかりません。
誰が、どうやって使っていたのでしょうか？

言い伝えられているのは、夏至の日の出は栗国島、お彼岸の春分・秋分の日の出は渡名喜島、冬至の日の出は慶良間島、だったそうです。まんがをよんでみてね。

今の太陽石は？

昔は太陽石のある所から日の出が見えていましたが、今では比屋定の太陽石も島尻の太陽石も、今は周りが木や草に覆われていて見づらくなっています。
比屋定の太陽石は今と違って道路が海側にあったそうですし、島尻の太陽石の周りは今のような畑ではなく田んぼだったので見晴らしが良かったそうです。またいつか、太陽石で太陽を観測してみたいですね。

